

202211 全道合同教育研究集会 社会科教育分科会報告

報告：前田輪音

全部で6本のレポートを、一日（午前・午後）かけて8～15名によりじっくり検討しあった。（他、1本は提出のみ）

参加者は、大学生、中学校教員、（元）高校教員、大学教員と多様な人たちが集まった。

当日発表されたのは、以下の6本である。

- ・松林洋（札幌白陵高等学校）報告（「ロシアの戦争をどう教えるか」
- ・角谷悦章（帯広南商業高等学校）報告「戦争を避けるための歴史総合の授業の取組」
- ・飯塚正樹（江別高等学校定時制課程）報告（その1）「「3・11」から10年生業と暮らし・心と文化の復興と地域づくりを考える旅」・（その2）「地域に根差した防災学習の試み2年目（2021年度～現在進行形）」
- ・池田理（札幌南高等学校）報告「Googleforms を使って日本国憲法写真展へ」
- ・平井敦子（真駒内曙中学校）報告「大人たちへの手紙～より良い社会を創る主権者として～中3社会科公民的分野 終章」

いま、社会で起きている諸課題、あるいは過去に社会で起こった諸課題—たとえば戦争、災害等—を、どのように子どもたちにつなげ・向き合わせ、自分のものにし、その課題を乗り越える力を育成していくのか、本分科会では様々な角度から報告・検討・交流がなされた。特に、2022年2月下旬から始まったロシア・ウクライナ戦争が強く影響を与えており、「戦争」という言葉が2本の報告タイトルに含まれるなど、特異な年度となった。

いずれも興味深い報告だった。一つ一つの概要は今回は紹介できないが、一つだけ記録者の感想を記載しておきたい。池田報告は、もともとは小学校での実践をもとにしている。池田報告が実践された高校はいわゆる「進学校」だが、そこにおいてもこの実践がなされる前まで、必ずしも憲法を自分のものにしてきていなかった生徒の姿を垣間見た。もとは小学校で行われている実践だからこそ、憲法の意義を実感しやすい何かがあるのだろう。それを高校に大胆に取り入れ、高校生に憲法の意義を実感させるべく、実践者が数々のしかけを用意しながら実践を展開していった様子が報告から伝わり、強く印象に残った。

最後の交流でも出されたことだが、学校で学ぶ子どもたちがこの社会の未来の担い手であることにはだれも異論はない。あらゆる内容・方法を用いて、子どもたちに真に響く実践を模索していくことは、今後いつそう求められていく。模擬選挙、模擬議会もまた、しかりである。

ロシア・ウクライナ戦争を前に、この1年、私たち大人は本当に悩みとまどい疲弊すらしているかもしれないが、だからこそ、今後いつそうの実践の充実を目指していかなければならない、と強く感じさせられた一日だった。

ところで、社会科教育分科会の世話人たちは今年度、テーマ討論1「どう答える？～平和への対話で困ったこと交流会～」に取り組んだ。その余韻が残った形で分科会運営がなされた。複数で集まって社会の課題を考え合うことの面白さを実感しながら、報告を検討しあったように思う。授業を実践するには、多様な意見があることを念頭に置きながら、いかなる社会をつくっていきたいのかを考え・引き出し・すり合わせていく機会が必要であり、それはときに、ワークショップの形になったり、紙面討論の形になったりと、多様である。自分の価値観のみに固執するのではなく、ありとあらゆる必要なものを活用しながら、学び手の頭をフル回転させて、自らの課題に引き寄せさせることが、いままさに求められているのだ、と、報告者は実感した。

なお、本報告は、当初予定していた動画記録が残っておらず、レポート内容や討論の内容を必ずしも正確には反映していないことをお断りする。